



よつば会だより

2020年4月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

3月は中旬から暖かさが増し、桜の開花も全国的に早まりました。しかし、新型コロナウイルスの感染が世界中に広まり、花見どころではない騒動になっています。尾道でも3月末現在、2名の感染者が確認されています。よつば会でも、かなりの当事者が楽しみにしていた尾道ふれあいの里での入浴・食事の会も万が一のことを考え、やむなく中止としました。4月は就職・進学などで人の移動も多くなります。これから感染の状況が、どうなっていくのか予測もつきませんが、一日も早く収まって、マツダ球場が真っ赤に染まる日が来ることを願いたいものです。



～安心して過ごせる場所、それが「サロンよつば」です～ 外出が難しい当事者に憩いの場を



「みんなねっと」誌3月号の「みんなねっと相談室から」は、若い当事者本人からの、自分の日常生活についての相談を取り上げていました。相談内容を次に紹介します。

「友と会ったり、人ごみに出ると調子をくずし入院になることが続いたので、この2年、通院以外は家族の中だけで過ごし、外の人との接触は避けています。最近母から『若いのだから人生を楽しんで生きてほしい』とよく言われ、そのたびにどうかしないと、と考えますが解決方法がなく、暗い気持ちになるばかりです」

この相談に対する、みんなねっとの相談員の方の対応は、要約すると次の3点になります。

- 家族との関係が穏やかに続いているのだから、ここは焦らないほうがいい。
- 親と一緒に生活していても、自分自身で、できることを一つでも増やしておく。
- 料理が好きでなくてもカレーライスなら作れるとのこと、カレーライスを作ってお母さんと楽しめば、家での生活にメリハリと自信が生じてくるのではないだろうか。

この相談者のように外との接触を避けて生活している当事者は、かなりいるのではないのでしょうか。そのような当事者も心の中では、外に出ていろんな人とおしゃべりをして楽しみたいという気持ちがあるものと推測します。しかし、病気のせいで、または過去の苦しい体験などから、その一歩を踏み出すことができないままに、家に閉じこもっているのでしょう。そのような当事者のために望まれるのは、安心して出かけることができる憩いの場所があったらということです。当事者同士が集まって、おしゃべりをしたい人はおしゃべりの輪に入り、一人で過ごしたい人は輪の外で静かにコーヒーを飲んで時間を過ごす。親と一緒に参加してもいい。帰りたくなれば、いつ帰ってもいい。そのような場所、いわば、外に出るための練習になる場所です。

よつば会は「サロンよつば」を水・土曜日の午前中に開いています。その目的は当初はよつば会会員の家族の方に来てもらって、おしゃべりや相談をしてもらうことだったのですが、最近は家族の方がやってくるのがほとんどなくなりました。代わりに当事者がやってきて、おしゃべりを楽しむ場になっています。やってくる当事者は4～5人で、ほぼ固定したメンバーです。そこで考えました。サロンにやってくる当事者たちも外の人と接触したくないという状況を体験してきているのではないかと思います。その当事者たちにピアとして接してもらえれば、「サロンよつば」が、外に出ることが難しい当事者にも安心して時間が過ごせる場になるのではないかと思います。当事者たちと相談をして、具体化を考えてみます。

3月の活動報告

- 28日 当事者との交流会 (中止)
29日 よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)

4月の活動予定

- 12日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)

* 当月開催予定の「家族のSST」は都合により中止とさせていただきます





～ 将来一人暮らしのできる子供にと切なる親の願い～ いい方向に変わってほしいのだが



「よつば会だより」先月号に、親子関係にかかわって、「雨が降ってきたら、一緒に濡れよう」と題した記事を書きました。その記事の中で「(子供を)大人にさせたかったら、親離れさせたかったら、自分(親)の子離れが先です」という、高森信子さんの言葉を取り上げました。しかし、この高森さんの言葉について、よつば会だより先月号では、字数の関係で簡単にしか触れられなかったのが、今回もう少し考えていきます。

私は「よつば会家族教室」や「家族の SST」で交わされた出席者の皆さんの話のポイントをメモしてきました。そのメモを再読して、親子関係につながることを拾い出したのが、以下の鍵かっこで示した部分です。

1. 親が子供に対して持っている思い

「子供は自己中心で、自分に都合のいいことしか考えず、親の思いを受けとめることができない」、「子供は自分の意に反することを言われると反発してくる。好きにさせていると機嫌がいい」、「子供に何を話しても『注意ばかり言う』と言葉を返してくる。『そうじゃないよ』と言葉を続けると機嫌が悪くなる」などがありました。子供が同席していない場の親の発言ですから、子供に直接ぶつけている言葉ではないのですが、親の本音が伝わってきます。親からすれば子供の将来のことが心配で、いい方向に変わってほしいと子供に語りかけているのですが、子供はそれを受け止めようとせず、相変わらず気ままな毎日を送っている。その子供の姿を見て、子供は「自己中心」だという思いになってしまうのでしょうか。

2. 親のほうにも問題があるのではないか

メモからは親が考えなければならぬことも出てきます。「親は心配の向こうに子供を見る習慣がついている」、「親には長年の習慣となってしまう子供に対する思い込みがある。例えば『お前はいつもそうだ』というような言い方による決めつけ」などです。そうしたパターン化した言葉の投げかけは、子供に不快な思いを持たせることになるでしょう。

3. 子供にいい方向に変わってほしいのだが

病気を抱えた子供が、将来一人で生活していくことができるのかという不安は、ほとんどの親が持っているでしょう。親は自分が元気なうちに、子供の将来に備えてできるだけのことをしておいてやりたいと一生懸命です。その一つが、子供の今の状況では一人暮らしは難しい、何とか一人暮らしができるように、いい方向に変えてやりたいということですが、子供はなかなか親の気持ちを受けとめてくれません。この、どうしたら子供がいい方向に変わってくれるかということに関してのメモからの言葉です。

「親が子供を変えようとしても、子供は変わらない」、「子供が変わるのには、何かインパクトを持ったきっかけがいる」、「子供を変えようとしない。変わるのを待つ」、「子供を変えようとするよりも、親が変わろう、そのほうがみやすい」など。「親がいないほうが子供は自立する」という言葉もありました。

このように並べてみると、親は子供を変えようとしても変わらないのだから、何もしないほうがいいと言っているようですね。しかし、ある程度真実だともいえることです。2.のところに書いた「親は心配の向こうに子供をみる習慣がついている」というのは、よつば会だより先月号に書いた「ゆでたまご理論」の、ゆで卵の黄身(子供の病気の状態や生きる上での苦労など)のほうに目が行ってしまって、白身(子供のいいところや頑張っているところなど)が見えなくなっている状態といえるでしょう。その状態で子供に語りかけるのでは、子供を褒めることは少なく、むしろ否定が多くなるでしょう。では、親はどうしたらよいのかという話に入りたかったのですが、今回も文字数が尽きてしまいました。よつば会だより5月号に続けることにします。(N.T)